

現職保育士・幼稚園教諭の研修に関する一考察

A Consideration on Training of Childcare Workers and kindergarten teachers

奥 泉 敦 司*
Atsushi OKUIZUMI

小 田 倉 泉**
Izumi ODAKURA

首 藤 敏 元**
Toshimoto SHUTO

志 村 洋 子**
Yoko SHIMURA

はじめに

保育制度の転換が先送りとなり、保育の質の保証のための取組みは一層重要な意味を持ってきている。本研究では、保育の質を担保するために最も重要と思われる保育者（保育士・幼稚園教諭）の「研修」に対する意識に視点を当て、平成22年度に埼玉大学が担当校として実施した「埼玉県保育士・幼稚園教諭合同研修会」参加者への意識調査から、今後の研修の基礎作りに向けて、保育者にとって役立つ研修内容や、保育改善に必要な実践等のあり方について検討した。

I. 経緯と目的

1. 保育士及び幼稚園教諭に対する研修の現状

平成20年度、保育所保育指針（以下、指針と略記）と幼稚園教育要領（以下、要領と略記）が同時に改訂された。認定こども園、あるいは「こども園」等の、行政主導による我が国の幼児教育のダブルスタンダード状態を解消しようとする動きが活発化する中での改訂である。

改訂以前の指針では、幼稚園教諭に対しては、日々の保育記録として、保育に関する自己評価が課されてきたが、保育士においては課されていなかった。しかし、平成21年4月から告示された保育所保育指針では、保育の内容に関する創意工夫や、保育士としての資質や専門性の向上が求められるとともに、保育の専門家集団として自己評価や自己改善に取り組むよう「義務」や「努力義務」が「告示化による規範性の明確化」として明記された。同様に、自己評価を一連のサイクルをもつものとして活用するために、研修の充実を図ることも同様に要求されることとなった。

この二つの点は、保育所と幼稚園という日本の幼児教育におけるダブルスタンダードの解消へ向けた取り組みにおいて重要な位置を占める。保育者に自己評価を課すことによる保育者の資質（専門性）向上あるいは、保育の質向上への動きであることが理解できる。そして、自己評価とともに採用後の資質向上を支えるのが研修制度であるといえる。

指針では、保育士に対する研修に関して「3 職員の研修等」より、「(一)職員は、子どもの保育及び保護者に対する保育に関する指導が適切に行われるように、自己評価に基づく課題等を踏まえ、保育所内外の研修等を通じて、必要な知識及び技術の修得、維持及び向上に努めなければならない。」と規定されている。同様に、幼稚園教諭に対しては昭和24年より「教育公務員特例法」として「第四章」より「第二十一条」から「第二十五条の三」に渡り、研修に関する権利が保障されてきた経緯が存在する。

2. 園内研修と園外研修（OJTとOff-JT）

保育士及び幼稚園教諭に対しては、役職別、公私の別、在職年数別等に渡り数多くの研修が用意され、活用が望まれている。いずれの研修に関しても二種に大別ができる。つまり、「園内研修」と「園外研修」である。

園内研修とは、保育士または幼稚園教諭が所属する園内において、行われる研修であり、「園外研修」とは所属保育所、幼稚園を離れ行われる研修である。「園内研修」は企業等ではいわれるところの「OJT」（職場内研修）に該当する研修であるし、「園外研修」となれば、「Off-JT」（職場外研修）と表現される研修に該当する。幼稚園教諭に関しても、平成14年に文部科学省の審議会報告として「幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書」として研修の活用に関する報告がなされており、園内外の研修の活用が幼稚園教諭の資質の向上のために必要であるとされている。

「園内研修」に関しては、所属する幼稚園、保育所によりその内容が一任され、外部の講師等を招くなど独自の取り組みと努力等がなされている。「園外研修」に関しても、同様にそれぞれの所属園・所の方針により実施されることとなる。しかし、園外研修に関しては、所属園・所を離れて行われるという性質上、職員の数の問題などから、その回数を十分に確保することが難しい園・所があることも事実である。こうした事態は、保育者の資質向上への取り組みの上でも障害となっているといえる。

* 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科

** 乳幼児教育講座

保育士、幼稚園教諭に対する資質向上が問われる現状において、自己評価活動や研修活動が保育士・幼稚園教諭を問わず、研修活動は資質向上を担保する上で欠くことができない活動であるといえる。園内外の研修による保育の見直しが、保育者らの保育の改善の機会となりうるのである。

3. 法定研修としての園外研修 (Off-JT)

保育所・保育士にとっては火急ともいえる研修制度義務化の直後にあたる平成22年度に本学が委託を受け、実施にあたったのが「平成22年度埼玉県保育士・幼稚園教諭合同研修会」である。本研修事業は、保育士、幼稚園教諭、公立私立を問わず、希望者に対しては任意による申し込みを以て受講を可能とした自治体主催の研修事業である。

前記のような状況の中、自治体が主催する法定研修において保育士・幼稚園教諭らの研修にのぞむ意識を検討することには、今後の法定研修に対する指標を得る上でも有意義であると考えられる。

保育士、幼稚園教諭ともに研修の重要性が指摘されるがその一因として、資質の向上等の理由の他に、保育現場における保育者モデルの少なさもあげられるのではないかと考える。垣内 (2011) によれば、埼玉県の保育士を対象とした調査で「自身の周囲に保育実践のモデルとなるような尊敬できる保育者がいるか」という質問に対して、公立私立 (民間を含む) を問わず、4割近い保育士が「いない」または「どちらともいえない」と回答したという。

以上のことから、保育者にとって園内での自己評価活動等の自己研鑽の機会に加え、外部的な刺激としての園外をメインとする研修活動が、日々の保育で見落としがちな多様な保育観を形成していく上で、重要な役割を果たすことが期待できよう。園外研修に対しては、園内研修と保育者の資質向上や保育の質の向上を進めていく上で今後ますます重要な位置を占めることが予想される。

次節以降、合同研修会の概要を紹介するとともに、参加した保育者らの研修に対する意識について検討していきたい。

II. 保育士・幼稚園教諭合同研修会の特徴と概要

1. 研修事業の特徴

「平成22年度埼玉県保育士・幼稚園教諭合同研修会」(以下、合同研修会と略記)の特徴は、名称の記載にある通り、保育士と幼稚園教諭の両方を対象とした研修を同時に開催した点に見出すことができるといえる。

前記のように、保育士、幼稚園教諭をはじめとして幼児教育の制度全体がその転換点を迎えようとする現状において、本研修会のような全県に渡る規模の研修会を実施できたことは、自治体レベルでのミニマムベースを策定する上でも貴重な機会となると考えられる。

2. 研修事業の概要

1 趣 旨

本研修会は、埼玉県内の保育所・幼稚園等に勤務する保育者が、現場で生じる様々な課題に対応する専門的能力を高め、その活用を図ることにより、地域での保育実践と子育て支援の充実・強化につなげることを目的とした。

2 主 催

埼玉県福祉部子育て支援課からの委託を受け、埼玉大学が実施した。

3 実施体制

本研修事業の運営を教育学部が担当した。平成19年2月に埼玉大学は指定保育士養成施設の認可を受けた。そこで、乳幼児教育講座が属する教育学部に実施本部をおき、教育学部長を総括責任者として運営にあたった。保育士及び幼稚園教員養成を担当する乳幼児教育講座に事務局を置き、「さくら子育てリソースセンター」を窓口として、事業の広報と受講生の募集、研修会準備等の業務を行った。講師は教育学部の教員、特に保育、保健医療、臨床心理、教育の専門家が務めた。

なお、「さくら子育てリソースセンター」は平成18年度～19年度文部科学省選定「資質の高い教員養成推進プログラム」において地域連携の拠点となった学内窓口の名称である。本事業の推進にあたっては、センターに事務補佐員を1名配置した。

4 対 象

研修会の受講対象者は、埼玉県内の認可保育所に勤める職員、公私立幼稚園の職員、認定こども園の職員であった。各研修会の受講生数の上限は、第2回では200名、他の回では会場の定員に応じ70～100名と設定した。

5 費 用

受講は無料であった。ただし、旅費等は受講者の負担とした。

6 全体スケジュール

研修会は平成22年9月から平成23年2月まで、毎月2回ずつ、合計12回行った。埼玉県私立幼稚園連合会の区分 (図1参照) に基づき、県内を東西南北の4地域に分け、地域ごとに交通の便を考慮した上で開催都市12カ所を決定した (表1参照)。受講対象者は、開催地域にかかわらず、全県から参加できるようにした。募集人数を超えた応募があった場合は、開催地域の保育園・幼稚園を優先して受講生を決定するようにした。

研修は1回 (1日) 単位で行うこととした。受講生はいずれか1回 (1日) のみの参加とした。しかし、第2

回の研修会を「埼玉大学主催の記念講演会」としたため、第2回のみ、他の回と重複して参加できるようにした。



図1 県内4地域を示す地図

研修会は、原則、講義2コマと演習1コマから成り、すべて90分とした(表1参照)。演習では、受講生は10名程度の小グループに分かれ、各自持ち寄りの事例、もしくは講師出題の課題についての意見交換を行った。そして、グループごとに発表した後、スーパーバイザーの講師がまとめを行った。グループ討議においても、スーパーバイザー(講師)と質疑応答ができるようにした。スーパーバイザーは午後の講義の担当講師が務めた。また補助のスーパーバイザーとして、必要に応じて、研修会事務局となる乳幼児教育講座の教員が担当した。

9:30	10:15	10:30	12:00	13:00	14:30	14:45	16:15	16:30
受付	開校・オリエンテーション	【講義1】 (90分)	休憩 (60分)	【講義2】 (90分)	休憩 (15分)	【演習】 (90分) ・事例検討 ・課題討議 ・ロールプレイ ・マイクロカウンセリングなど	第2回(9/27)と 第4回(10/25)は【講義3】	アンケート記入・閉校

図2 研修会の進行例

(2) 事業の日程と会場

全12回の会場と開催日時は表1のとおりである。なお、第8回研修会は当初東部地区の越谷市の公民館を予約し

表1 開催月と会場

開催日	地区	募集	会場	アクセス
第1回 H22年9月16日(木)	南部	100名	川口市 川口キョボラ4F フレンジア	京浜東北線 川口駅(東口) 徒歩5分
第2回 9月27日(月)	南部	200名	さいたま市 大宮ソニックシティ小ホール	JR・東武野田線 大宮駅(西口) 徒歩5分
第3回 10月18日(月)	北部	100名	本店市 中央公民館大会議室	JR高崎線 本店駅(南口) 徒歩20分
第4回 10月25日(月)	東部	80名	加須市 市民プラザ301会議室A・B・C	東武伊勢崎線 加須駅(北口) 徒歩5分
第5回 11月12日(金)	北部	70名	秩父市 秩父宮記念市民会館第2会議室	秩父鉄道 御花畑駅 徒歩4分 西武秩父線 徒歩4分
見学本研修外 11月13日(土)	南部	保育所30名	さいたま市 埼玉大学教育学部附属幼稚園	京浜東北線北浦和から徒歩15分
第6回 11月24日(水)	西部	80名	坂戸市 坂戸市文化会館第1会議室	東武東上線 北坂戸 徒歩12分
第7回 12月15日(水)	西部	80名	川越市 川越西文化会館1F 第1・第2会議室	東武東上線 霞ヶ関駅 徒歩10分
第8回 12月17日(金)	東部	70名	さいたま市 埼玉大学教育学部G101教室	京浜東北線 または埼京線 / バス15分
第9回 H23年1月21日(金)	東部	100名	春日部市 春日部市民文化会館大会議室	東武野田線・伊勢崎線 春日部駅 徒歩15分
第10回 1月26日(水)	西部	100名	所沢市 所沢市民文化センターミュージアム展示室	西武新宿線 航空公園駅(東口) 徒歩10分
第11回 2月9日(水)	南部	80名	川口市 川口総合文化センターリリア大会議室	京浜東北線 川口駅(西口) 徒歩3分
第12回 2月15日(火)	南部	70名	さいたま市 さいたま市民会館らわ705・706会議室	京浜東北線 浦和駅(西口) 徒歩7分

ていたものの、研修内容(表現活動)との調整がつかず、埼玉大学を会場とした。

7 研修カリキュラム

(1) 内容

現代の保育課題である「発達障がいと特別支援」、「難しい保護者への対応」、「地域子育て支援」、「健康と安全」の内容、及び新保育所保育指針・幼稚園教育要領に示された新しい課題に関する内容を中心に、研修計画を立てた。各研修会とも、上記のテーマに関する研修が2つ以上含まれるようにすると共に、演習形式を取り入れることにより、より主体的な研修ができるようにした。表3に研修内容とそのねらいを示す。

(2) 方法

全12回のうち10回の研修において、「演習」を取り入れることにより、より主体的な研修ができるようにした。「演習」では、受講者は予め研修会参加に向けた事例を持ち寄り、10名以内のグループで事例の紹介と意見交換を行った。その後、スーパーバイザーを交えてのバズセッションを行った。最後に、グループの代表者がバズセッションの成果を発表し、スーパーバイザーがまとめを行った。講師によっては、事例ではなく、演習課題を提示、もしくはロールプレイやマイクロカウンセリングを行うこともあった。なお、参加者の事例は、個人情報の漏洩、人権への配慮を考慮し、原則、印刷物を用意しないこととした。

これらの演習により、講師としてはきめ細やかな指導ができ、受講者としては研修の成果を高めることができると期待できる。さらに、保育所の職員と幼稚園教員が、互いの保育観や子ども観を交換し、グループでの経験を共有することにより、互いの保育の特色を理解した上で、

表3 研修の内容とねらい

内容	分野	ねらい
特別な支援を必要とする幼児の保育	特別支援	保育所・幼稚園において特別な配慮を必要とする乳幼児の発達特性と援助方法、保護者の支援、最新の脳科学について学び、子どもの最善の利益を表現させる保育の実践に役立たせる。
保護者対応/職員の精神的健康	保護者支援 特別支援	カウンセリング技術やアサーションスキル、精神保健の基礎知識を学び、保護者対応、職場での人間関係、子育て支援に資する専門性を身に付ける。
子育て支援・親育ち支援	保護者支援	現代社会の子育て課題を確認し、地域での親育ち支援、発達支援コンサルテーション、企業での取り組みについて学び、園の子育てと連携した計画立案に資する専門的知識を身に付ける。
保育課程・教育課程/指導計画・要録作成/自己評価/保育の充実と環境の工夫/保幼力の連携	指針・要領	保育課程・教育課程の作成、指導計画の立案、保育要録・指導要録の役割と作成の仕方について学び、保育の質を向上させるために、どのように計画を立て、日々の保育をどのように記録していくか、子どものために小学校に向けた要録をどのように作成していくかについて見つけ出し、今後の保育の充実につなげる。また保育の質の向上のための自己評価について認識を深める。
子どもの発達・健康と安全	健康・安全	子どもの心身の発達特性、感染症とその予防について学び、また子どもの特性に応じた安全教育について理解し、養護の充実した保育の計画と実践に役立たせる。
新しい保育理論と保育実践	指針・要領	新しい幼児教育方法、表現実践方法について学び、創意工夫のある保育を実現させる専門性を高める。
保育の実践事例の検討と経験の共有/実践に学ぶ「環境による保育」(幼稚園・保育所見学)	総合	グループ討議の形式をとり、各自持ち寄った事例で意見交換することにより、保育所と幼稚園の特質について理解を深め、それぞれの保育の充実につなげる。また保護者対応についての講師出題の課題をグループで検討することにより、専門的な知識と技術を深く学ぶことができる。

指針・要領・・・①保育所保育指針、幼稚園教育要領に関すること
健康・安全・・・②乳幼児の健康と安全、感染症予防に関すること
特別支援・・・③発達障害等、特別の支援を要する児童の保育に関すること
保護者支援・・・④保護者との関わり、親の養育力向上への支援
総合・・・⑤保育所または幼稚園の施設見学もしくは少人数での形式の研修

新しい保育と幼児教育の実践創造につなげることを期待した。

8 講師

埼玉大学教育学部で保育士・幼稚園教員養成に携わる専任の教授及び准教授、附属施設の教員、さらに非常勤講師として埼玉大学の授業を担当している他大学の教員、保育分野で全国的に指導的な役割を果たしている研究者・実践者を講師とした（表4参照）。

9 園・保育の見学

本研修事業外として、施設見学を実施した。埼玉大学教育学部附属幼稚園の公開保育・研究協議会が11月13日（土）に実施されたことに合わせて、主に保育所職員を対象に、幼稚園保育実践の見学を実施した。附属幼稚園の公開保育と研究協議会の参加対象は全国の国公立幼稚園、および県内の私立幼稚園である。それを県内の保育所の職員にも広げ、本研修事業とあわせて案内を行った。園の見学者の定員により、募集は上限30名とした。埼玉大学の附属幼稚園は保育室の環境、日々の保育の環境設定、指導計画に工夫がみられることが特色であり、見学を通して、現代の保育所保育の主要なテーマである「環境による保育」の優れた実践例を学ぶことができると期待した。県内保育所の職員を対象とした見学の受付は、本研修の事務局が行った（図3）。

表4 研修会の講師

内容/分野	講師	所属	講義内容
特別な支援を必要とする幼児の保育	名越 斉子	埼玉大学教育学部准教授 (特別支援教育講座)	発達障害とその連続線上にいる子どもたち
	千代田 義明 大島 晋葉	埼玉大学教育学部特別支援教育臨床研究センター「いのち」	特別な配慮を必要とする子どもの発達理解と指導
	榎原 洋一	お茶の水女子大学教授	保育者のための発達障害と脳神経科学の最先端
保護者対応/職員の精神的健康	澤崎 俊之	埼玉大学教育学部教授 (教育心理カウンセリング講座)	保育者のためのアサーショントレーニング
	尾崎 啓子	埼玉大学教育学部教授 (教育実践総合センター)	配慮が必要な保護者への対応
	堀田 香織	埼玉大学教育学部教授 (教育心理カウンセリング講座)	保育者のためのカウンセリング技術
	竹内 一夫	埼玉大学教育学部教授 (学校保健学講座)	職員・保護者のメンタルヘルス
子育て支援/親育ち支援	吉川 はる奈	埼玉大学教育学部准教授 (家政教育講座)	保育者としての保護者理解と援助
	汐見 穂幸	白梅学園大学学長	地域の子育て課題とこれからの保育所・幼稚園の役割
	安藤 哲也	NPO法人 ファザーリングジャパン代表	父親の出番をつくる保育所・幼稚園
保育課程・教育課程/指導計画・要録作成/保育の充実と環境の工夫/保幼小の連携	藤原 孝子	聖徳大学教授	明日の保育をつくる～新幼稚園教育要領・保育所保育指針を踏まえて
	増田 まゆみ	目白大学教授	明日の保育をつくる～新幼稚園教育要領・保育所保育指針を踏まえて
	首藤 敏元	埼玉大学教育学部教授 (乳幼児教育講座)	発達の連続性と非連続性からみた保幼小連携のめざす
	新井 正直	埼玉県加須市大桑小学校校長・大桑幼稚園長	保幼小の連携のあり方と実践の工夫
	和田 明広	埼玉県所沢市北秋津小学校長	保幼小の連携のあり方と実践の工夫
	伊野宮典子	埼玉大学非常勤講師・前埼玉県国公立幼稚園研究会会長	保育課程・教育課程と指導計画/保育の自己評価/保育のための要録作成
子どもの発育発達、健康と安全	剣持 浩	社会福祉法人いっぴは会 むすび保育園長	保育課程・教育課程と指導計画/保育の自己評価/保育のための要録作成
	野井 真吾	埼玉大学教育学部准教授 (学校保健学講座)	子どもの身体の発達の特質と保育における健康教育
	関 由起子	埼玉大学教育学部准教授 (学校保健学講座)	病気やけがへの対処法と感染症予防
新しい保育理論と保育表現実践	清水 由紀	埼玉大学教育学部准教授 (教育心理カウンセリング講座)	幼児の発達特性と防犯教育
	庄司 康生	埼玉大学教育学部教授 (教育実践総合センター)	「からだ」が語る表現-遊び込む「対話」から「学び」と「育ち」へ
	浅田 茂裕	埼玉大学教育学部教授 (技術教育講座)	木育保育の実践
	志村 洋子	埼玉大学教育学部教授 (乳幼児教育講座)	音楽表現実践力を磨く
保育の実践事例の検討と経験の共有	小田倉 泉	埼玉大学教育学部准教授 (乳幼児教育講座)	これからの幼児教育方法を学ぶ
	名越斉子・竹内一夫・堀田香織・尾崎啓子・澤崎俊之・吉川はる奈 / (補助) 志村洋子・首藤敏元・小田倉泉	埼玉大学教育学部	保育の創造工夫と実践の共有: 明日の保育に向けて

(講師の所属に関しては平成22年度当時のものを記載。)



図3 施設見学内容

3. 事後アンケートにみる保育者の研修会に対する意識

以下に、全12回の研修会の事後アンケートにおける研修会に対する自由記述を抜粋する。

全12回の事後アンケートにより、研修会に対する多くのフィードバックを得ることが出来た。内容を抜粋して記載するに当たり、以下の二つの観点より、分類を行った。一つ目は、「研修の内容へのフィードバック」として、参加者自身の保育親に関わるコメントや研修による自身の保育に関する知識、技術等の更新に対するコメントが見られた中心に抜粋した。二つ目は「研修会の性格に関するフィードバック」とした。これは、今回の合同研修会が園外研修であるという特性を考慮し、参加者が園外研修でしか経験できない内容について触れているコメントしている内容について抜粋を行った。

(1) 「研修の内容へのフィードバック」

・「今回のような現場からの声や現状を把握した上での実践報告は良いと思います。また参加したいと思いま

す。」(第1回)

- ・「発達障害について、分かりやすい講義していただき、知識のない私も良く理解できました。又、実践で生かしたいと思う。」(第1回)
- ・「それぞれの研修を聴き、改めて「幼児教育」という分野が多岐に渡って考えるべき点がいかにたくさんあるか、また、『子どもの育ち』と考えることがどれほど社会にも影響を与えていくことになるのかということを知ることができました。常に社会の流れや人々が求めている社会のあり方について敏感に感じとり、より良い『子どもの育ち環境』とはどのようなものなのかを自分自身に問いかけ考えていくことが保育者として大切なことだと研修会を通して考えさせられました。」(第2回)
- ・「研修で学んだ理論を具体化できるようにしていきたいと思います。お話を聞いたあと、明日から子どもたちとどうするか講師の先生やみなさんと考えあっていたいと思う。」(第5回)
- ・「人間を育てる、育てる私たちが人間として必要な事を学べる研修が必要だと思います。今回、音楽表現実践力を磨く研修で音楽表現は自分でもピアノは下手だし、歌もへたなので、音楽を楽しむでよいということが1つわかって、とてもよかったです。私も楽しい保育をしていきます。」(第6回)

- ・「アサーション、他人、家族への言動についてももう一度考え直す良い機会になった。結局は、会話をする者同士意見を伝えつつも歩み寄りなければいけないと思った。」(第7回)
 - ・「1日の内容が充実して色々なことを学ばせて頂きました。日常の保育の中で、ちょっとした視点の角度をかえながら、これからもいつも新鮮な気持ちで楽しく子どもたちとまた大人どうし、みつめあって、向き合って成長していきたいと思う。」(第8回)
 - ・「保育を取り巻く状況がどんどんかわっていく中で、今までつみあげてきた大切なことを、知らせていくことも大切なのかなと思う。」(第8回)
 - ・「具体的な現場の例が大変参考になります。保育の根っこの部分で大切なものを学んだ思いがします。講義と身体を動く研修、両方組み入れて頂いたので、受け身だけでなく、楽しく参加できて良かった。」(第8回)
 - ・「今回保育士になって「表現」ということはどういうことか改めて考えられた。夢中になれる場＝安心できる場をつくるために私たち保育士がどのような保育をしなければいけないか考えていく必要があると思う。日頃行っていた手遊び、うたを本気で伝えることをしていなかったので、曲に対して感じて表現していきたい。」(第8回)
 - ・「三瓶先生の講義はとても楽しく参加することができました。今後の保育にいかして、子どもたちと楽しく歌いたいと思う。」(第8回)
 - ・「今日はありがとうございます。午前、午後と違うテーマで、でも伝えていくことの大切さがとてもよくわかった。保育の知識だけでない、色々なことに目を向けることの大切さがあらためてわかった。」(第8回)
 - ・「朝から体調が悪く、出席できるか心配でしたが、まさに夢中になりながら参加できた。自分自身を振り返り、見つめ直す機会を作って下さり、ありがとうございます。もっと学んでからだで感じ表現していける保育士になりたいと思いました。」(第8回)
 - ・「記憶だけでなく記録に残し全体で子どもの現状を把握することの大切さを感じました。又、歌うだけでなくイメージを持って伝える大切さがよくわかりました。楽しみながら参加させていただきました。」(第8回)
 - ・「午前中の講演では、実に5歳児担任としては直面している内容でした。現場の生の声をもっともお互いに伝え合い考え合える場が必要であるように感じました。連続講義であってもいい内容でした。」(第10回)以上のように、「研修の内容のフィードバック」に関しては、自身の保育観を見直す機会になったものや、保育の知識の更新することができたとする内容が多く見受けられた。
- (2)「研修会の性格に関するフィードバック」
- ・「三つの内容すべてとても勉強になりました。また、同じ内容で、他の保育士にも是非聞いてほしいと思
 - た。」(第2回)
 - ・「今回、他園での取り組みなどの話をきける場があり、とても参考になりました。なかなか他園の様子や意見など聞ける場がないので、今後もこのような研修があると嬉しい。」(第3回)
 - ・「ロールプレイはとてもしゃべった。私にはむずかしい課題でしたが、実際にやってみた事で、色々なことを感じ学ぶことができました。」(第5回)
 - ・「ロールプレイは毎回とても参考になり、刺激を受けます。様々な研修別で、その内容にあったロールプレイを体験していきたい。」(第5回)
 - ・「今日の研修を受け、小学校の実態、保幼小の連携の重要性を知ることができ、とても勉強になりました。また、保護者とのコミュニケーションの大切さ、対応する難しさを実感することができ良かったです。今日学んだことを生かせるようにしたいと思う。」(第5回)
 - ・「日頃、保護者の方や子どもたちと接する中で病気や怪我も大切な事ですし、アサーションも大切な事であると思います。勉強になりました。学んだ事を職場へ伝え、今後生かして行ければいいと思います。」(第7回)
 - ・「講義がわかりやすかった。職場に持ち帰り周知したいと思う。アサーショントレーニング…自分の思いを伝えるのは難しいと思うが職場の円滑なコミュニケーションをはかる為に実践していきたいと思う。」(第7回)
 - ・「演習で他の園の先生たちの話しが聞けたことが自分にとって、とても参考になった。」(第9回)
 - ・「保育園の先生方と話し合いをすることがありませんでしたが、幼稚園とはちがう悩み、先生方の考えや指示方など具体的に聞くことができ、とてもよかった。」(第9回)
 - ・「小学校の校長先生からお話を聞けたことで、学校側の思いを知ることができました。お母さんと面談するにあたり注意点なども伺えて、とても参考になった。」(第10回)
 - ・「新人研修以外の研修に初めて参加しました。自分の働いている幼稚園から出て、講師の方の話はとても参考になりました。日々の保育を見つめなおす良い経験となった気がします。いろんな園の先生方の意見がきけて良かったです。また今後もがんばっていきたい。」(第10回)
 - ・「園内の他の職員も、この内容を受講してもらいたいと思う。」(第11回)
 - ・「埼玉という身近な専門セッションの協力で、テーマに沿ったより具体的な内容になったと思う。今後もこのような形で、タイムリーな研修の場ができたと思う。」(第11回)
 - ・「実践演習では、他の保育園の先生方の意見をきくことができ勉強になった。」(第11回)

- ・「グループディスカッションでは、自分の思いを伝えることの難しさを感じながらも普段話すことのできない方々の意見も聞くことができて、勉強になった。」(第12回)
- ・「全県にわたり、このような研修があり、とても良かったです。今後もこのような研修が継続して開かれることを望みます。」(第12回)

以上のように、「研修会の性格に関するフィードバック」では、普段接することの無い保育士や小学校、幼稚園教諭同士の考えを聞く機会となった内容や、所属園・所の同僚にも同じ研修の受講を望む内容等が見受けられた。

次節では、合同研修会に参加した保育者らへの質問紙調査の結果より、日々の保育においてその改善の手掛かりとする経験の中身と、それらをいかに得ているかということに関して結果を提示したい。

Ⅲ. 合同研修会での意識調査

本研修会では、研修会後の事後アンケートとして、研修会自体に関するフィードバックを得るとともに、もう一つ別に保育者らの保育に関する意識調査を行った。

1. 調査の概要

対象：合同研修会参加者（第1回から第12回）に参加した保育者ら585人を対象として調査票を配布し、そのうち513票の有効回答を得ることが出来た。回収率87.7%で、全513名のうち女性490名、男性23名であった。

方法：研修会の事後アンケートとともに配布し、研修会終了後に出口にて回収した。

内容：質問紙法による調査を行った。設問を大きく4つ設定した。設問1では、回答者の個人情報を問う内容で、設問2では、保育者としての考え方の多様性を問う内容とした。設問3では、自身の保育を向上させる上で、役に立った経験を問う内容とし、設問4では、自身の考える具体的に役立つ経験を問う内容とした。この設問4では選択式の回答に加えて、保育を改善させる上でよかった経験として自由記述による回答を求めた。フェイスシートでは、アンケートには正解はないこと、参加が自由であることを明記した。

2. 結果及び考察

以下、内容を抜粋して記載する。今回は、設問4「保育を向上させる上で、こういった事柄が役に立つことが多いですか。多いと思う順番に1位から5位まで括弧に

番号をご記入ください。」に関して、結果を提示し、考察を加える。設問4では以下の13項目を選択肢に挙げた。

(1) 保育改善の手掛かりとする事象

結果として、保育を改善させる上で役立つものとして、図4に示したように、第一位に「①同僚の保育者の意見」、第二位に「①園長や主任の意見」、第三位に「⑩園内外の研修」であった。これらの三つはそれぞれ多い割合にて、上位の3位に表れている。

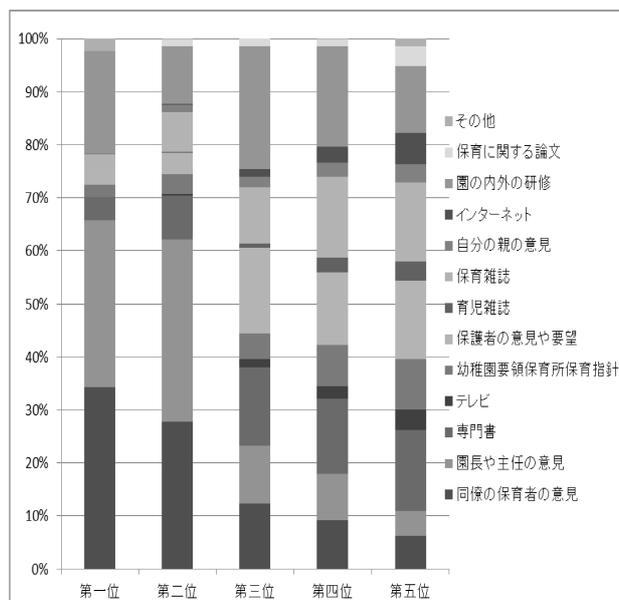


図4 保育改善のための手掛かり

これら保育者らが手掛かりとする割合の高い事項(「同僚の保育者の意見」、「園長や主任の意見」、「園内外の研修」)からもわかるように、保育者らが自身の所属する園・所を中心に自身の保育改善の手掛かりをもとに、保育観を形成している実態を表しているといえる。

(2) 保育改善する上で役立った経験

また、設問4の自由記述として、「保育を改善させる上でよかった経験」に関することの記入では、多様な回答が得られたが、記述内容より、大きく次の5つに分類できた。

タイプ1：経験重視

- ・「現場での実践で、様々な経験の積み重ねが大切だと思う。」
- ・「経験を積むこと。失敗したときには、色々な意見を聞き何がいけなかったのかを検証したり、反省したりする。一つの方法ではなく、いくつかの実践をしながら感じ取る。常に反省を心がけて次へ活かしたいと思っている。」
- ・「研修や日々の保育実践の経験。他者（園長や同僚）など。経験年数を重ねること（いろいろな場面を経験すること。）」

表5 設問4 回答選択肢

①同僚の保育者の意見	⑧保育雑誌
②園長や主任の意見	⑨自分の親の意見
③専門書(含む、育児書等)	⑩インターネット
④テレビ	⑪園の内外の研修
⑤幼稚園教育要領・保育所保育指針	⑫保育に関する論文
⑥保護者の意見や要望	⑬その他
⑦育児雑誌	

タイプ2：子どもともに成長

- ・「様々な状況の子どもたちを見る（保育する）ことだと思う。以前勤めていた園では、家庭環境・障害など、様々な子どもたちがいた。そういう子たちの成長をいろいろ見ることで自分自身も色々な考え方、見方をできるようになったと思う。」
- ・「子どもと遊びこむことで色んなものが見えてくる。失敗を恐れずにやってみること。」
- ・「10人いれば10人の育ちがあり、まったく同じものがないことを念頭におき、常に柔軟な姿勢で取り組むこと。」

タイプ3：同僚・周囲との協働

- ・「色々なタイプの保育者と組んで担任になる。それぞれのいいところはそのまま取り入れ、あまりよくないところは反面教師にする。他の保育者を観ることが何よりも大事だと思う。」
- ・「自分の知識だけに頼らず、所長、主任、同僚との話を密にしたり、保護者との話をする場を設けたり、また研修や本、インターネット等で専門的な意見を積極的に取り入れる。」
- ・「同僚はもちろん、違う職種（栄養士や事務）の方からの感じ方も参考になる。」

タイプ4：自己研鑽

- ・「計画→実践→反省・改善（職場内での話し合い）→実践を繰り返す中、園外での研修などで新しい知識を取り入れ、子どもたちの現状（保護者の現状も）に合わせて活かしていく。」
- ・「自分で考える保育をして、評価・反省し次へつなげていくこと。」
- ・「自分ではできない問い否定的な気持ちを持たず、なんでも率先してやってみること。先輩先生からやってほしいといわれなくても自分で進んでやってみること。場数を踏んでいくと自然に実践力が培っていくのではないか。」

タイプ5：失敗経験

- ・「失敗は成功のもと。失敗からいろいろ学んできた。失敗を失敗だけで終わらせないで、そこから何かを学ぶことが大切だと思う。」
- ・「経験を積むこと。失敗したときには、色々な意見を聞き何がいけなかったのかを検証したり、反省したりする。一つの方法ではなく、いくつかの実践をしながら感じ取る。常に反省を心がけて次へ活かしたいと思っている。」
- ・「保育現場での実体験。特に失敗の積み重ね。」

IV. 考察および今後の課題

1. 事後アンケートにみる研修会に対する保育者の意識

事後のアンケート結果より、「研修の内容へのフィードバック」として、参加者自身の保育観に関わるコメントや研修による自身の保育に関する知識、技術等の更新に

対するコメントが見られたことは、研修会の講義内容の選定が参加者らの要求を満たしていたと捉えられる。加えて、発達障害をもつ子どもや保護者対応といった流行の課題を取り入れたことも上記に影響を及ぼしていると考えられる。

二つ目の「研修会の性格に関するフィードバック」と分類した内容に関して、園外研修である以上、日常の職場を離れて研修を受けたことの有益さを実感し、研修の成果を持ち帰ってもらうことが主催した側の希望ではある。今回の事後アンケートでは、園外研修、特に今回の合同研修会の特色でもある保育士と幼稚園教諭の双方が研修に参加し、講義と演習を行うという形態に対するフィードバックを得ることができた。加えて、園外研修という性質上、園内研修とはその性格を異にするために本合同研修会では「講義」2コマ、「演習」1コマという研修形態を整えたため、上記のように園外研修でない経験できないといったフィードバックを得ることが出来たと考える。この点に関して本合同研修会の企画意図が達成できたのではないかと考える。また、(2)「研修会の性格に関するフィードバック」として分類した内容では、他の園・所職員にも同様の研修を受けてほしいといった記述が見受けられたことから、園外研修として執り行われたことの意義を示すものであると考える。

つまり、参加者らの意識としては園外研修においても、園内研修同様に、自身の保育観や保育内容の見直しを迫る内容のある講義内容を求める実態がある。その一方で、園外研修ならではの外部との交流に対して意義を見出している姿が読み取れる。

2. 質問紙調査から捉える保育者の意識

設問4にて、保育者らが自身の保育改善において役立つと捉える事象、および経験に関する記述を求めた。保育改善のための手掛かりは、第一位の「①同僚の保育者の意見」、第二位の「①園長や主任の意見」、第三位の「⑩園内外の研修」と同様に所属園・所を中心に展開されている姿が読み取れる。

同様に、自由記述にて求めた保育者らの捉える役立つ経験は、分類した「タイプ1：経験重視」、「タイプ2：子どもとともに成長」、「タイプ3：同僚・周囲との協働」、「タイプ5：失敗経験」にみられるように、自身の所属園を中心とする経験である。

一方で、「タイプ4：自己研鑽」といった自身による反省を迫る内容が含まれていた。「タイプ4：自己研鑽」のような反省等を迫る内容に関しては、保育所保育指針で述べるところの自己評価や園内外での研修の機会が必要になってくると考える。それは、自身の保育経験を外部から眺める、あるいは自身の経験を客観視するといった機会として研修活動や自己評価活動が機能することを企図されているからである。

保育者らの日々の保育経験の見直しの機会として研

修活動や自己評価活動を捉える必要があると考える。

3. 全体の考察

事後アンケートと質問紙調査の結果より、保育者らは自身が所属する園を中心に同心円的に保育の改善の手掛かり、役立ちの経験を得ているといえる。

今回の結果より、合同研修会の参加者の保育改善の手掛かりや役立ちに関する意識から読み取れるのは、園外研修に求める知識や技能の習得が、園内での経験の延長線上にあるといったことである。

つまり、保育者らの研修へのニーズに応えるのであれば、園外研修（Off-JT）の性質を活用し、園内での経験や園内研修では得にくい知識を園外研修という外部で得る機会にする必要があることである。そこには、保育者らの日々の経験を客観化するといったことも含まれるであろうし、自身の保育経験を第三者が代弁するといったことも含まれると考えられる。

また、園外研修である以上、園内研修とは違った研修方法とする工夫が必要である。今回の合同研修会では「講義」と「演習」という2つの形態を研修会に取り入れたことが参加者からの肯定的なフィードバックを得ることにつながったと考える。これは、研修会が参加者に対して参加を要求する形態であり、参加型の研修会であったといえる。さらに、合同研修会という性質が、普段顔を合わせることの少ない他者との協働的な学習を促したと捉えることもできる。

今後も継続した合同研修会を開催するに当たっては、以上のような研修方法の工夫に加え、地域性に基づく、不易と流行を考慮した研修内容の選定も必要になってくるといえよう。

参考・引用文献

- 平岩定法 (2009) 「認定こども園における保育士・幼稚園教諭の専門性の向上と『研修』の課題—保育の質をささえるもの」『子ども学研究論集』第1巻、69-80頁
- 秋田喜代美・箕輪潤子・高櫻綾子 (2007) 「保育の質研究の展望と課題」、『東京大学大学院教育学研究科紀要』、第47巻、289-305頁
- 垣内国光編著 (2011) 『保育に生きる人々—調査に見る保育者の実態と専門性』ひとなる書房
- 厚生労働省 (2009) 「保育所における自己評価ガイドライン」
www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/pdf/hoiku01.pdf (URL:平成24年9月現在)
- 文部科学省 (2002) 「幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/019/toushin/020602.htm (URL:平成24年9月現在)

謝辞

本論文を執筆するにあたり、「平成22年度埼玉県保育士・

幼稚園教諭合同研修会」を開催する機会を与えて下さいました埼玉県福祉部子育て支援課の皆様、ご参加いただいた皆様とご尽力いただきました全ての皆様に感謝申し上げます。